

「池に浮んだ琵琶」

むかし、信濃の国を一人の琵琶法師が歩いていました。

ある日、旭山という山の奥深くにある大きな池のほとりに腰をおろして琵琶を弾き始めました。

一曲弾き終った時、「どうか、もう一曲聞かせてくれ。礼に秘密を教えよう」と、声が聞えました。

そこで法師は、もう一曲、琵琶を弾きました。

すると突然、法師の目の前に大きな龍が現われて、「それでは秘密を教えよう」と、法師に語りかけたのです。「わしはこの池の主の龍じゃ。いざよいの夜に池を荒らして大洪水を起こす。お前は早く逃げるがよい。この話を他にもらせば、お前の命はない」こうして、龍は姿を消しました。

法師が驚いて必死になって山を下りて村里へ入る頃は、もう朝でした。そして、法師は自分の命が惜しかったので、龍に言われたとおりに、何も言わずにこの村を通り過ぎようとしてしました。しかし、親切にしてくれる村人たちのことがどうにも気になって仕方ありませんでした。そして、法師は泣きながら「許してくれ、わしは人間の心をうしなうところじゃった。今宵、山の池が荒れて大洪水が起こりますじゃ。早よう逃げて下され」すると、村人たちは大急ぎで水のつかない高台へと逃げました。こうして、村人は救われたのです。

やがて水が引き、村人たちは村へ帰ってきました。「法師さまのおかげで、わしら村人はみんな助かった」その時、激しい山鳴りとともに黒雲が舞い降りてきました。村人たちがひれ伏して、気づくと法師の姿はありませんでした。

「今のは龍・・・」村の男たちは一目散に山へ追いかけてきました。そして、村人たちが池にたどり着き、目についたのは、池の面に漂う古い法師の琵琶でした。龍との約束を破った法師は、命を絶たれてしまったのです。

この時から、この池を琵琶池と呼ぶようになりました。



龍（イメージ）